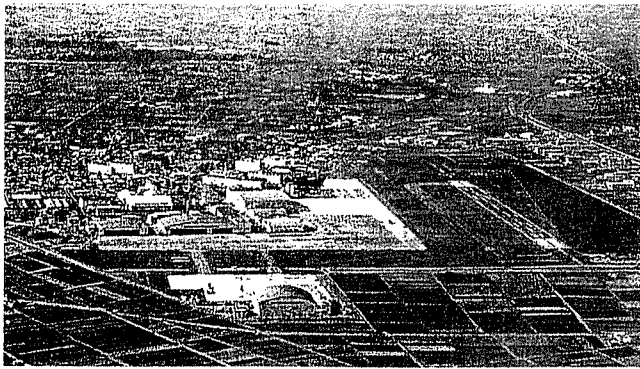


陸自駐屯地紹介シリーズ 第24回

翼甦る 明野駐屯地

陸上自衛隊航空学校等

駐屯地シリーズ編纂委員会



駐屯地全景

「伊勢は日本人の心の故郷」
 領かれる人も多いのではなからうか。皇室の祖「天照大神」を祭神とする内宮と農業・漁業の神、豊受大神を祭神とする外宮、更に別宮以下所管社

まで合計12社が点在する地域は、伊勢市は勿論、松阪市、鳥羽市、度会郡、多気郡、志摩郡にわたっている。社殿ばかりでなく祭事に我が日本民族古来の風俗の伝承があり、20年に一度の遷宮は農・工芸技術保存の推進力となつて今なお受け継がれている。

明野駐屯地は内宮の北西約10kmにある。アクセスは鉄道経由が便利で、新幹線名古屋駅で近鉄特急伊勢賢島行きに乗り継いで東京から約4時間で明野駅に着く。林と畑の平地が続き、田舎の雰囲気が残っている一帯である。約2km程の道を行くと正門前に着く。約40m先に国旗掲揚塔が目に入り、その手前に荒鷲のブロンズ像、左手には学校本部があり、その奥に管制塔が見える。この駐屯地が、明野陸軍飛行学校時代から受け継いでいる筈の雰囲気を探したが、目に付く建物は新しく、いかにも堂々として新しい時代を意識させられた。

明野飛行場

現在は陸軍時代の約10分の1に縮まっており500mの滑走路が漸くとれる広さしかないが、計器飛行機能の整った飛行場として宇都宮飛行場と双壁を為している飛行場である。

滑走路及び着陸点

ここには500m舗装滑走路とこれに直交する同じく500m芝生滑走路及び7個のヘリコプター離着陸スポットがある。滑走路が短いことが大きな障害となつて最新の固定翼機の離着陸は困難となつており、将来ばかりか現在の固定翼指揮連絡機の運用に問題となつている。

管制業務と施設

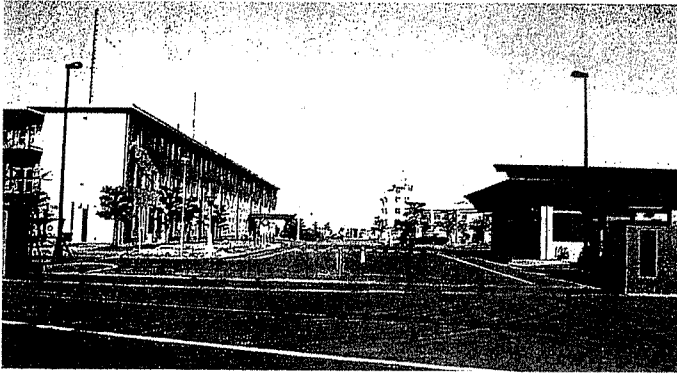
我が国では航空交通管制業務及び飛行通報業務、飛行情報業務は航空法の規定に基づき国土交通大臣の権限に委ねられ、自衛隊の飛行場では、国土交通大臣から権限の委任を受けて管制業務が行われていて、残念ながら防衛大臣の権限ではない。明野飛行場ではターミナル関連の4種の業務が全て行われて航空管制塔、管制レーダー施設、航空無線標識(NDB)、タカン等の電波灯台)が設置されており、またそれぞれ資格を持つ隊員が配置されている。ターミナルレーダー管制業務を行う空域は業務開始の昭和58年当時から思いも付かない程削減されていまっていく。理由は中部空港が対岸の知多半

島に開港したためである。先輩先覚者の業務開始構想の作成と関係先への調整の苦勞を知る者として複雑な思いを禁じ得ない。その他に航空氣象業務、飛行通報業務などの業務が行われ、その為の運行事務所があるが、一見して狭すぎる。次の立て替え時には必要なら広さが確保されることを祈りたい。

明野の歴史

明野陸軍飛行学校の歴史についてはご存じの方も多いことで今更と考えるが、お許し頂いて主要事項を要約したい。宇治山田郊外の明野ヶ原に陸軍航空学校空中射撃班が設置されたのは大正9年4月、ライト兄弟の初飛行から17年後、代々木練兵場に於ける日本最初の飛行から10年後の事である。その年の9月最初の学生が入校し、翌大正10年陸軍航空学校明野分校に昇格、更に大正13年には陸軍明野飛行学校として独立し、主に戦闘機の戦技教育を続けたが昭和16年12月開戦に伴い、教育所要の大幅増により、幹候、少飛、下士官学生の戦技教育を他校に委譲し、航空士官学校卒業生や転科者の教育に当たった。

昭和17年に天竜、昭和18年に北伊勢に分教場を設け、引き続き佐野、富士、高松に分教場を設け或いは水戸分校を開校した。だが時は既に遅く軌道に乗る前にB29の本土爆撃を受け、正規の



駐屯地正門

教育が乱され期間短縮、或いは学生の中途原隊復帰等となり、19年6月に明野飛行学校は明野教導飛行師団、水戸分校は常陸教導飛行師団と改称され、教育と平行しながら防空任務に転用される事態を迎えた。昭和19年10月比島決戦に際しては第30戦闘飛行集団として200機が出征したが2ヶ月の激戦で戦力を失い、その後昭和20年8月15日を迎えたのである。この前後の苦戦に苦戦を重ねた戦いぶりは叙述に耐え難い。ただ瞑目するのみ。

明野に翼が甦ったのは昭和30年8月浜松に陸上自衛隊航空学校が移駐してきた時である。その後幾度か教育内容や装備機の変遷があったが昭和54年6月AHI1Sを領収してから、航空学校は支援職種の実施学校から戦闘職種の実施学校に生まれ替わって現在に至り、なお熱い心を抱きながら未来を見据えているのである。

駐屯部隊等

陸上自衛隊航空学校

航空学校は明野本校の他、整備教育主体の霞ヶ浦校、陸曹操縦教育を主体とする宇都宮校(駐屯地名は北宇都宮)を隷下に持つている。規定されている訳ではないが陸上航空の総本山として、また校長はその頂点に立つ者として将来の職種発展、日頃の士気の振作、更には安全管理指導の先頭に立つことが期待され、また自らも重い責任を感じておられることが窺えるのである。

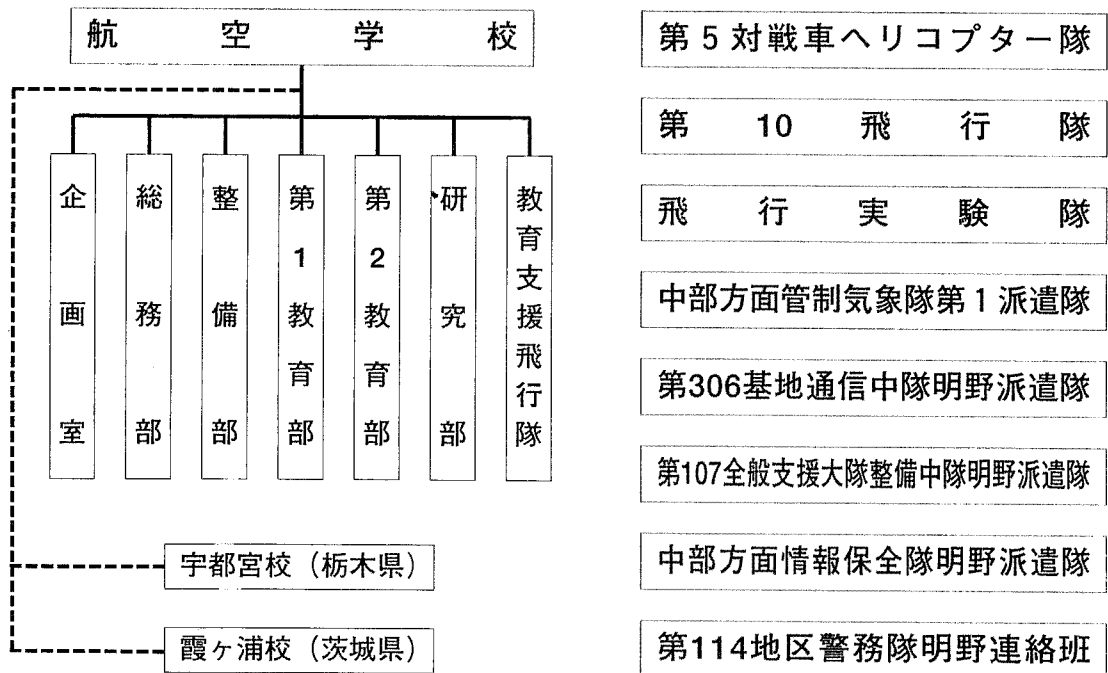
企画室

本校・両分校の所掌する事項について年度・中・長期視野にわたる方針事項を樹立しその実行を監督する校長の指揮監督を直接補佐する部署である。

総務部

航空学校本校及び明野所在部隊の勤務・生活環境作りの支援と、飛行場の維持管理、航空救難等を実施している。また部外に対する広報窓口である。

駐屯部隊の紹介



第1教育部

航空科職種の初級・中級幹部に対し師団の作戦・戦闘及び航空科部隊の運用に係わる教育を実施し、将来の飛行隊長又は飛行隊等の幕僚として求められる資質識能を付与している。

第2教育部

幹部自衛官に対し航空機基本操縦を教育し、また多用途ヘリコプターUH-60 JA、観測ヘリコプターOH-1、対戦車ヘリコプターAH-1Sの機種転換教育、HUIHの計器飛行検定官教育を実施している。

整備部

幹部の運用・操縦教育・調査研究等に対応するため航空機整備、搭載無線機、アビオニクス整備を担当している。

研究部

職種運用の基本的事項に関する調査研究のほか、部隊運用教範及び訓練資料等作成を任務としている。

教育支援飛行隊

航空学校及び富士学校の幹部学生への教育訓練の支援、研究部の調査研究支援、富士総合火力演習等支援を任務としている。

第5対戦車ヘリコプター隊

中部方面航空隊(本部は大阪八尾市)に所属し、対戦車ヘリコプターをもって各種火力戦闘を行う部隊である。

第10飛行隊

東海・北陸6県担当の第10師団所

属、多用途ヘリコプター等で空中機動等各種航空活動を行う部隊である。

飛行実験隊

開発実験団(本部は富士)に所属し航空機信頼性向上の試験飛行を実施している。

中部方面管制気象隊第1派遣隊

中部方面航空隊隷下中部方面管制気象隊(本部は大阪八尾)に所属、明野飛行場航空管制、航空気象、航空通信業務を任務とし、また飛行部隊の野外訓練に支援班を派遣して航空保安支援を行う。阪神淡路大震災に於いては発災翌日に神戸市王寺公園に飛行統制所を開設し、密集する航空機に対して航空交通情報を提供したが実質的には航空交通管制業務に近いものであったよう

うだ。(某国会議員がホームページで「自衛隊は数日たってからしか出動しなかった」と記していたが、本当に事実を確認したのだろうか)。

第306基地通信中隊明野派遣隊

駐屯地の通信回線を用い、維持・補修し全国部隊と通信を確保している。

第107全般支援大隊整備中隊

明野派遣隊 中部方面後方支援隊(本部は京都桂)に所属、在明野駐屯地車両整備と保安検査を任務とする部隊である。

伝統の継承

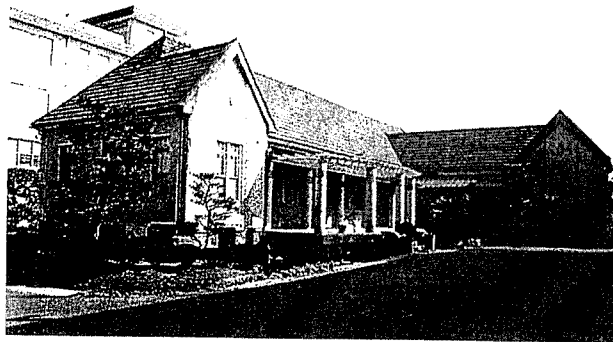
「明野……」航空科元幹部としての筆者がこの一語を呟く時「切なさ」「懐かしさ」が複雑に交錯した感情にとらわれる事がある。「切なさ」は大正年間明野発足の時から現在に至るまで訓練飛行に従事中や、事変戦役で出征し空に散華された陸軍軍人軍属・自衛官の御霊への鎮魂の祈りに起因する。須く明野を訪れる者はまず忠魂塔で祈るべきである。特に忘れて欲しくないのは地上にあって対空戦闘や地上戦等で戦死された将兵、軍属に対して忘れることなく祈りを捧げることである。典型的な例がある。昭和19年の比島作戦に出勤した第30飛行集団には、明野飛行場近郊で招募した16・17歳の少年軍属が比島に追及した。飛行場勤務員や整備員としてである。出発時は外地へ行けるので嬉々とした表情だったという。しかし現地に着いてみれば、航空戦力は既に影もなく、地上戦闘に組み込まれ武器も食料も無いまま山中を彷徨い多くが餓死したと伝えられる。人間一番苦しく切ない死に方は「餓死」だという。体力も気力も無くなり人間としての尊厳さえも失って命が絶えるからだ。だからこそ、多くの人の鎮魂の祈りが欲しいと思うのである。

記念館は建物自体が記念の思いに充ちている。明野草創期の昔を伝える建築様式と館内展示物は時間を取ってしつかり拝観すべきものであった。飛行第64戦隊長加藤建夫少将の肖像画或いは特別攻撃隊八絃隊の写真を拝し、暫く息も詰まる荘厳さがあった。「懐かしさ」について取材行帰途に列車内で拾い読みした一冊がある。明野にある何冊かの誌碑の一つ、陸上航空50周年を記念して発刊された『温故知新』である。内容はその時々々のエピソードに従事した元自衛官が叙述した50編近い文と資料・写真を掲載した大作であるが、かなりの文が筆者の自衛官生活と重なる時期であり、記事の一行毎に懐かしさを感じる文が多かった。総じて感じたのは今の航空科部隊の姿は軽々容易に出来上がったものではなく、その時々々の多くの人ががき、奮闘し、一步一步築き上げて漸く今日に至った歴史があったことを今更ながら痛感した。特に対戦車ヘリコプター隊実現に係わる一連の研究・事業化は航空学校ばかりでなく多くの人々が様々な部署で全知全能を振り絞ったことが綴られている。筆者も実現直前期に陸上幕僚監部防衛部編成班勤務の後輩が部隊編成に必要な定員のひねり出した姿を目の当たりにしている。その時は実現に向けた剣が峰にあり、後輩の奔走ぶりに敬服する一方、疲労の色は

限度を超えているのではと、それこそ息を飲む思いがあった。

戦闘部隊への変貌を見据えて

陸上航空は「見る」「運ぶ」から長い間かけて「見る」「運ぶ」「撃つ」への変身を遂げてきた。「運ぶ」迄については過去数限りない災害派遣で「実動経験」を重ねその集大成として新潟中越地震ではめざましい成果を上げた。しかし「撃つ」は経験を重ねることを前提にする事は出来ない。研究と訓練を積み重ねる事によって実戦に使える運用思想を打ち立て精強な部隊に鍛え上げなければならない。問題は研



航空記念館講堂 (旧陸軍将校集会所)

究や訓練で組み込む条件と地上訓練装置である。多様化した侵攻様相に対応した厳しい様相を組み込まなければ「撃つ」はクレール射撃場での「撃つ」の如き範囲に留まり、「戦場で勝つために撃つ」にはなり得ないであろう。敵の攻撃を回避し、敵を撃滅しうる操縦技術の開発習得は必須事項と愚考する。段階的訓練によってさらに実戦に役立つ戦闘部隊として発展を続けられるよう期待したい。侵攻様相を加味した戦闘戦術訓練には幾つかの峠を越えなければなるまい。或いは命がけの峠も有るかもしれない。訓練段階を踏み、十分な地上訓練装置を活用し、呉々も犠牲者を出さないことを祈る次第である。これ故に平常の要務飛行や体験搭乗などでは規則・手順を厳守するようお願いしたい。訓練や要務飛行で人命を失うような事がないように家族やOBは心から祈っている事を心のどこかに置いて欲しい。

故郷となる

航空学校に学び、或いは明野に勤務した人の中にはこの地を第2の故郷と呼ぶ人も少なくない。その理由は伊勢神宮、二見浦、鳥羽湾などの場所、小俣祭り、伊勢神宮奉納花火大会、式年遷宮お木曳きなどの行事に心からの懐かしさを感じるからであり、退官後この地に居を構える者が多く、或いは首

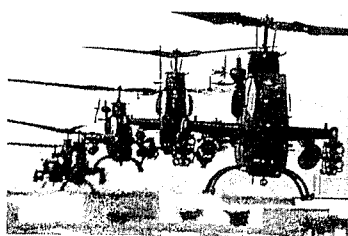
都圏で航空OB会に加入し結びつきを保っている人がいる所以であろう。

地域の人々からの好意も寄せられている。有名な「赤福」の社長を会長とする南勢防衛協会を初め幾つかの団体から協力も受けている。

筆者よりも上の年齢の人には懐かしく思う筈の一人の婦人がいる。その名を「おとらさん」と云う。断じて獍猛な容貌なのではない、むしろ美人と呼ぶに相応しい。経営しているスーパーマーケットが「牛虎」と云う事で甚だ失礼なニックネームを付けられたが、カンラカラカラと笑い飛ばしながら明野駐屯地の宴会を格別のサービス価格で引き受けて呉れた、忘れられない人である。

取材に当たり、当会員の吉田顕彦氏及び陸自62B竹内武司氏に多大な啓発を受けた。感謝したい。

文責 松村興延 陸自64



陸上航空の歴史

1953(28年～)	1960(35年～)	1970(45年～)	1980(55年～)	1990(H2年～)	2000(H12年～)
1183人	2138人	4651人	5444人	6101人	
	272機	351機	386機	435機	

明野駐屯地装備航空機

UH-60JA (多用途ヘリコプター)



馬力 1600×2 飛行時間 約4.5h
 巡航速度(km/h)240 座席数(P)2+15
 最大全備重量 9.970kg
 製作会社 川崎重工

OH-1 (観測ヘリコプター)



馬力 777×2 飛行時間 約2.5h
 巡航速度(km/h)260 座席数(P)2
 最大速度 278km/h
 最大全備重量 約4.000kg
 製作会社 川崎重工

OH-6D (観測ヘリコプター)



馬力 375 飛行時間 約2.5h
 巡航速度(km/h)230 座席数(P)1+3
 最大速度 282km/h
 製作会社 川崎重工

CH-47JA (輸送ヘリコプター)



馬力 4336×2 飛行時間 約5.0h
 巡航速度(km/h)240 座席数(P)2+55
 最大全備重量 22.680kg 中砲、大型車
 両等の空輸可能
 製作会社 川崎重工

AH-64D (戦闘ヘリコプター)



馬力 1800×2 飛行時間 約2.5h
 巡航速度(km/h)270 座席数(P)2
 武装：空対空ミサイル「ステインガー」、
 70mmロケット弾、30mm機関砲
 製作会社 富士重工

AH-1S (対戦車ヘリコプター)



馬力 1485 飛行時間 約2.0h
 巡航速度(km/h)200 座席数(P)2
 武装：対戦車ミサイル・トウ (TOW)、
 70mmロケット弾、3銃身20mm機関砲
 製作会社 富士重工